
園子のラブラブ大作戦！in大阪

真愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

園子のラブラブ大作戦！in大阪

【Nコード】

N6345U

【作者名】

真愛

【あらすじ】

新一が戻ってきて、新一と蘭は付き合い始めた。それなのに、まだ平次と和葉は幼なじみのまま…。そこで園子は2人をくつつけるためにラブラブ大作戦を行うことに！

結構ラブコメだったり、シリアスになったり？

そんな中でいろんな人の心が揺れ動いていくー。

組織壊滅後のストーリーです。灰原哀は宮野志保に戻って帝丹高校に通っているという設定になっています。

不定期更新になると思いますがあらかじめご了承ください>m(_

—
m
<

プロローグ

とある休み時間」。

「ねえ、園子！志保！」

「何？」

「夏休みにはいったら大阪に来ないかって和葉ちゃんに誘われちゃった！」

「えっ！そうなの？」

「うん、それで2人も一緒に行かないかな？って思ってた」

「多分大丈夫だと思うわ！」

「でも、何日くらいいるつもりなの？」

「1週間！」

「そうね、多分大丈夫だと思うわ……」

「わたしも！もう高3だから部活終わっちゃったしね」

「じゃあ行こうよ！」

「ええ」

「そうだ、工藤君は呼ばないの？」

「えっ、べ、別に新一はいいよ……」

「何よ、あれからずっといちゃいちゃしてるくせに！」

「してないってば……！」

「工藤君？ちよつと来てくれるかしら……」

「な、なんだよ！」

「蘭がね、一緒に大阪行こうだってさ」

「なんだよ、また和葉ちゃんに誘われたのか？お前」

「う、うん……」

「しゃーねえなあ……。でも俺は事件があるかも……」

「だめよ！これは蘭からの命令なんだから！」

「命令じゃねえだろ！別に」

「あら、逆らうの？いいわよ……。ふっ……。それなら……」
「わかりました、行けばいいんだろ！行けば！」
「わかればよろしい」

そんなこんなで4人は大阪へ行くことに――。

プロローグ（後書き）

どうも！真愛です。

現在「いっしょ」も執筆させていただいているので、両方不定期更新になってしまふと思いますがどうしても平和小説を書きたい！という事でこの小説を書かせてもらいます。

相変わらず駄文ですか見てやってください↑

平次と和葉の現状 - 蘭 side -

その日、家に帰って今日の夕飯のことを考えているとき、ふと和葉ちゃんに園子と志保も一緒に行くことを報告しなきゃ！と思ったわたしは和葉ちゃんに電話をかけてみることに。

プルルルル…

「もしもし、蘭ちゃん？」

「和葉ちゃん！あのね、園子と志保も大阪に行けるって！」

「ほんまに？」

「うん」

「ごめん、蘭ちゃん…。志保ちゃんって誰？」

「あつ…。志保ってね、最近転校してきた子なんだけどもっちゃんい子なんだ！」

「へえ…。」

「きつと和葉ちゃんとも気が合うと思うよ！」

「そうやとええけど…」

「それより和葉ちゃん」

「ん、何？」

「最近服部君とどう？ラブラブなの？？」

「へ、平次は別に…。ただの幼なじみやし…」

「本当にー？」

「本当や！平次かてうちのこと幼なじみとしか思ってたへんもん…」

「そっか」

「ええなあ、蘭ちゃんは好きな人と結ばれて」

「和葉ちゃん…」

「ごめんごめん、重い話してもうたな！」

「全然大丈夫だよ！じゃあそいうことで楽しみにしてるから！」

「うん！うちも楽しみにしてる」

「じゃあ、バイバイ！」

「うん、バイバイ！蘭ちゃん」

ガチャツ…

和葉ちゃん…。

少し胸が苦しくなる。

『ええなあ、蘭ちゃんは好きな人と結ばれて』

服部君もきつと和葉ちゃんのことを…、
そう言えたらいいのに…。

でも、第三者のわたしが2人の間に割り込むことは出来ないよ、や
っぱり。

やばっ…！どうしょ。なんか服部君と和葉ちゃんの関係に自分と新
一を重ね合わせてる…。

わたしに何か出来ることないかな？
そうだ、園子ならきつといいアイデア出してくれるはず！

明日聞いてみよう」。

計画・園子side・

次の日のとある休み時間―

「ねえ！園子！」

「何？蘭」

「あのね…、和葉ちゃんと服部君のことなんだけど…」
「うん」

蘭から、昨日和葉ちゃんと電話で話したことを聞いた。

「ねえ、どうにかならない？」

「そうね…」

確かにわたしも放っておけないわ…。

あの2人お似合いだしさ。

よし、こうなったら…、

「ラブラブ大作戦、久しぶりに考えるとするか！」

「ラブラブ大作戦…ってちよつとまさかそれって！」

「なに、信用してないの？」

「そいうわけじゃないけど…。本当に大丈夫？」

「任せなさいって！わたしが大阪にいる間に絶対ラブラブにさせて
見せるから！」

「じゃあ、わたしも協力する！」

「だったらわたしも…」

「志保！」

「わたしも行くんだから、考える権利はあるでしょ？」

「そうね！3人寄れば真珠の知恵っていうしさ」

「それを言うなら文殊の知恵でしょ！」

「ははは…、気にしない気にしない。とりあえず、考えよつか」
「そうだね」

そして、結局『ラブラブ大作戦』が完成したのはそれから1週間も後のことだった。

平次との電話・新side

そして、いよいよ当日。

大阪へ向かう新幹線内でのこと――

「ねえ、本当に大丈夫？園子」

「大丈夫よ、任せなさい！わたしが和葉ちゃんと服部君をラブラブにさせてみせるんだから。あ、ちゃんと工藤君も協力してよ？」

「へいへい……」

「何よ！その言い方……。やる気あるの？」

「あるわけねえだろ！おめえらが無理やり俺に手伝えっていうから……」

「そう……。無理やりねえ……」

蘭が手をぼきぼき鳴らし始めた。

「い、いや……。実は俺も手伝う気まんまんだっただよな！」

「本当に？」

「あ、ああ！本当だよ」

「ふーん……。それよりさ、園子」

3人でガールズトーク炸裂中……。

ははっ、女子の話にはついていけねえぜ……。

ブルルルル……

電話だ。

服部からじゃねえか！

ラッキー！ここから抜け出せるぜ！

「わりい、服部から電話だ。すぐ戻る」

「はいはい、いつてらっしゃい」

違う車両に移動して通話ボタンを押した。

「もしもし」

「おおー工藤！今どこらへんや？」

「相変わらずハイテンションだな…」

「なんや、つれないやつちゃのー…」

「あのなあ、ガールズトークについていけねえから暇で仕方ねえんだよ！」

「それで機嫌悪いんか。まあ、しゃあないわ。女はそういうもんやからな」

「なんだよ、その知ってるような言い方」

「俺かてなあ、散々和葉にいろいろと付き合わされとるんや。工藤かてあの姉ちゃんに付き合わされとるんやろ？」

「ま、まあな…」

「どうや、あの姉ちゃんとはうまくやってるか？」

「普通だよ、普通。それよりおめえはどうなんだよ？」

「俺は別になんもあらへんで」

「本当かよ」

「ああ、和葉とはただの幼なじみやしな。あんたのことはちゃんや」

「なんだよ、まだ幼なじみなのか？」

「別に向こうかて俺のこと好きなわけやないし、俺かてあいつのこ
と別に好きやあらへんし…」

「まだ強がつてんのかよ」

「べ、別に強がつてへんって！」

「へいへい、まあもうすぐ着くと思うから。切るぜ」

「ああ、楽しみにしてるわ！ほな」

「まったく、服部がこのままじゃ結ばれそうにねえぜ」。

この『ラブラブ大作戦』での俺の役割は服部の気持ちを和葉ちゃんに告白させるところまで持っていくこと。

服部の気持ちがわかるのは俺だけだからって押し付けられちゃったけど、この調子じゃ無理なんじゃねーか？

でも、それが出来なかったらあいつらに何されるかわかんねーし…。

はあ…、先が思いやられるぜ…。

平次の家で - 和葉 side -

そろそろ平次を迎えに行かな…。

と思い、家を飛び出して少し急ぎ足で平次の家へと向かった。

ピンポン

チャイムを鳴らすと、平次んとこのおばちゃんが開けてくれた。

「あ、おばちゃん！こんにちは」

「あら、和葉ちゃん。こんにちは。今平次なら部屋で準備してるで」「ありがとう！おばちゃん。おじゃまさせてもらっわ！」

そして、平次の部屋のドアを開けると…

「か、和葉！！」

「平次…！！あんたまだ準備終わってへんかったん！？」

平次は、まだ着替えてすらいなかった。

「あ、ああ、工藤と電話しててな」

「へえー、よくそんな余裕あったもんやな…」

「そ、それでなあ、ちようど今着替えよう思ってたところなんや！」「さやか…」

ガチャツとドアのノブを閉めた。

ああーあほらしあほらし！

あんな奴相手にする方がバカやったわ。

昨日何時に迎えに行くかちゃんと言ったんやけどな…。

先行つてよつと。

待つてたら蘭ちゃんたちが着くころに間に合わへんわ…。

「和葉！」

勢いよくドアが開いた。

「平次…？」

「ほら、行くんやろ？」

「あ、あんた着替えるん早いなあ…。」

「あ、ああ、後着替えるだけやったしな」

ちゃんと約束守ってくれたんかな？平次…。

「なんや、気色悪いなあ…。お前どんな顔してんねん」

やばつ…、アタシ顔赤くなつてた…？

「な、なんでもあらへん…！…！」

恥ずかしくなつて平次の顔が見れなくなつてしまつ。

「時間ないんやろ？行くで」

「ま、待つてや！平次！」

平次の背中が少し大きく見えた。

過去の記憶・志保side・

「遅くなっちまって悪かったな」

「ええ…。別にいいけど」

「蘭と園子は…？」

「寝てしまったわよ…」

「そ、そりゃあ悪かったな…」

「仕方ないじゃない、工藤君のほうで席が窓側なんだから…」

「おいおい、そんなにキレんなって…」

「キレてないわ」

「じゃあ、俺も寝るとすつかあ…」

「さんざん待たせといてさっさと寝るつもりかしら？」

「お前も寝ればいいじゃないかよ…。ふあーあ…」

「ちよっと、工藤君…！」

も、もう寝てるわ…。

やっぱりだめね…。わたしなんかじゃ…。

工藤君の頭には蘭しかないってことくらいわかってるんだから…。
何も悲しくなんか…。

「工藤君…！」

「大丈夫なのか!？」

「幸いこの程度だよ…」

組織を壊滅してすぐに、工藤君は博士の家にやってきた。
肩に血をにじませて…。

「ちょ…ちょっと座らせてくれねえか…」

このときの工藤君は、いつもとは明らかに違った。
目はうつろで、いつもの目の輝きはない。

「病院に行った方がいいんじゃないのか？」

「あ…ああ…、大丈夫だ…。ちょっと疲れちまったただだよ…。それよりさ…、病院に行く前に灰原にこれを渡しておこうと思ってよ…」

「えっ…？」

「ほらよ…。A P T X 4 8 6 9 だ…」

工藤君の手に1粒のカプセルが握られていた。

「工藤君…」

「これで、解毒剤作れるだろ…？」

「え、ええ…」

「灰原…、もう心配はいらねえぜ…？組織は壊滅したから…っ」
「く、工藤君！工藤君！？」

でも、もう返事は返ってこなかった…。
それでも脈は、まだ動き続けている。

「博士！救急車を…、救急車を呼んで！」

「あ、ああ…！」

工藤君…！あなたは本当にバカだわ…。

そこまで無理してここに来なくなたって…、解毒剤を作るなんてことよりわたしは、わたしは…

工藤君のほづがずっと大切なんだから…。

「っ……」

目の前には蘭と園子…、そして隣には工藤君…。

今は夢だったのね…。

3人とも、まだ寝ているようだ。

それにしても、こんな夢を見るなんて…。

このことは、わたしの記憶からは消すことができないってわけね…。

思い出したら、心の中にしまいこんだ気持ちが溢れだしそうになってしまうというのに…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6345u/>

園子のラブラブ大作戦！in大阪

2011年10月7日00時14分発行